

博士学位（甲）論文審査報告

氏名	久米 晋平
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第51号
学位授与年月日	平成27（2015）年9月30日
学位授与の用件	学位規則第3条第1項該当
学位論文題目	李二曲儒学思想の研究
論文審査委員	主査 家井 眞 本学文学部教授
	副査 町 泉寿郎 本学文学部教授
	副査 大島 晃 上智大学名誉教授
	副査 江藤 茂博 本学文学部教授

論文内容の要旨

本論文「李二曲儒学思想の研究」は、中国明末清初期の儒学者李二曲（顛、1627～1705、陝西盩厔の人）が志向した儒学とはいかなるものであり、そしてそれが宋学（程朱学・朱子学）明学（陸王学・陽明学）を経過した清初期にあつていかなる意味を持っていたのかという問題意識のもと、李二曲の言説（『二曲集』、『四書反身録』）に即して考察する。

李二曲を研究するにあたり、博士学位請求者（以下、請求者）は次のような研究計画を立てている。

一、李二曲の言説の精確な読解／二、李二曲と講学活動／三、李二曲の『四書反身録』と四書学史／四、黄宗羲、孫奇逢と共に「清初三大儒」と称された李二曲の時代的位置づけ／五、李二曲の後世への影響（特に日本に対して）

一の「李二曲の言説の精確な読解」は、本論文全編に渉る課題であり、本論文第一部第二章、第三章、第四章、第五章は、講学の場を記録した資料を活用することから、二の「李二曲と講学活動」と密接な関連がある。また、第二部に於いて、『四書反身録』及び呂涇野（栲、1479～1542）の『四書因問』、馮少墟（從吾、1556～1627）の『疑思録』を取り上げたのは、三の「李二曲の『四書反身録』と四書学史」に収斂される。

本論文は、上記の研究計画のすべてを実行しているとはいえないが、李二曲の言説の読解に主眼を置いた基礎的研究といえよう。

本論文の構成は、以下の通りである。

目次

序論 李二曲について

第一部 李二曲の〈学〉

第一章 修学過程と「悔過自新」

第一節 問題の所在

第二節 「切実なる功夫」を獲得するまでの歩み

第三節 体裁上から見た「悔過自新説」の特徴

第四節 「悔過自新」の実例

(一) 謝上蔡

(二) 薛敬軒

(三) 周處

第五節 「悔過自新」主張の意義

第二章 「觀感録」に込められた聖人像

第一節 問題の所在

第二節 生知と学知

第三節 「觀感録」梗概

第四節 「觀感録」述作の背景

第五節 王心齋の立志——孔子を学ぶ——

第六節 樵夫朱光信——王心齋の感化——

第七節 馮少墟に感化された朱貧士と張本徳

第八節 志向すべき聖人像とは

第三章 「效先覚之所為」をめぐって

第一節 問題の所在

第二節 馮少墟の「效先覚之所為」理解

第三節 高彙旃との交流

第四節 高彙旃の「学而時習之」理解

第五節 李二曲の「学而時習之」理解

第六節 馮少墟の「效先覚之所為」理解の受け止め方

第七節 先覚者をどう受け止めるか

第四章 〈心〉の確立

第一節 問題の所在

第二節 「學髓」述作の背景

第三節 〈心〉の定義

第四節 「念」とは

第五節 〈学〉は動静を兼修すること

(一) 静に対する慎重な態度

(二) 動静合一とは

(三) 静的工夫の具体的手法

第六節 〈心〉の確立とは

第五章 明体適用の学

第一節 問題の所在

第二節 「整屋答問」に見る儒学者像模索の跡

第三節 明体適用の実践者を列挙した「體用全學」

第四節 李二曲編纂の適用書「司牧寶鑑」

(一) 述作の意図

(二) 構成要素とその体裁

(三) 「呂公論属」

(四) 「知府之職」

(五) 「知州知県之職」

(六) 「司牧寶鑑」の主旨

第五節 明体適用の学とは

小結

第二部 李二曲に影響を与えた呂涇野・馮少墟の四書解釈及びその展開

第一章 呂涇野の『四書因問』

第一節 問題の所在

第二節 呂涇野の生涯

第三節 体裁上から見た『四書因問』の特徴

第四節 王陽明の講学に対して

第五節 読書と尚行

(一) 孔子の朝廷における言動と容貌

(二) 孔子の衣食住

(三) その他——孔子の君に事え、友と交わる道、容貌の変化、言動の細やかさ

——

第六節 『四書因問』に込められた善読という姿勢

第二章 馮少墟の『疑思録』

第一節 問題の所在

第二節 『疑思録』述作のその背景

第三節 体裁上から見た『疑思録』の特徴

第四節 「疑う」ということ

第五節	善読の実例
(一)	四書本文に対して
(二)	朱子説に対して
第六節	『大學章句』を改正した意図
第七節	『疑思録』は〈心〉に気付くための営為を示した書
第三章	李二曲の『四書反身録』
第一節	問題の所在
第二節	体裁上から見た『四書反身録』の特徴
第三節	なぜ四書なのか
第四節	「反身実践」的読解の実例——『大學』——
(一)	『大學』の捉え方
(二)	『大學』は明体適用の書
(三)	格物理解
(四)	平天下に対する言及
第五節	「反身実践」的読解の実例——『論語』——
(一)	「克己復礼」章について
(二)	「小道」章について
第六節	『四書反身録』とは

小結

結論

引用参考文献

以上

本論文の内容は、以下の通りである。

序論「李二曲について」では、これ迄李二曲がどのような人物として捉えられてきたかを、二曲の伝記（『清史稿』）に沿って確認し、更に先行研究を概観する。その上で、本論文の基本姿勢と研究目的は、李二曲が志向した儒学を二曲の言説に即して解明することにあると述べる。また、李二曲の学問と人物、及び交際した人物との関係を年表としてまとめている。

第一部「李二曲の〈学〉」では、李二曲の修学過程、学的基盤、講学活動の所産という観点をもとに、その学的特質を明らかにする。

第一章「修学過程と「悔過自新」」では、李二曲が「悔過自新説」（『二曲集』巻一）を刊行する三十歳迄の修学過程と「悔過自新説」の特質を考察する。

李二曲の修学時期は、明朝末期の崇禎年間（1628～1644）及び清朝初期の順治年間（1644～1661）の動乱期にあたる。この時期、なかでも陝西地方の住民にとって、生死という問題はより切実に受け止められていたが、李二曲も流賊に襲われたり、自警のために兵学を修めたとき

れる。李二曲は生涯「庶民」と自称したように、もともと名のある家柄でなく、加えて父李可從が「李自成の乱」に巻き込まれて戦死した後は、困窮極まる生活を余儀なくされた。

請求者は、このような時代状況及び生活環境が李二曲の〈学〉に深刻な影響を与えたと指摘する。更に、郷土の先人である馮少墟の言説に触れたことが、これ迄の日常生活に汲々としていた状況を打開する一大契機となったとし、以降、「聖学の淵源」（孔子・孟子が示した、人としての本来の在り方）を求めて、経書類、史書類を中心とした読書に励んだ姿は、知県（県知事）クラスの人士の認めるところとなったと指摘する。

請求者は、李二曲が「前言往行」（先人の書や風聞）を自らの師とし、それらを模範として「小人禽獣の域」（現状・生活環境）からの脱却を図ろうと努力した修学過程を跡付け、その到達点が「悔過自新」という手法に結実していると指摘し、「悔過自新」を李二曲の〈学〉の原型と位置づける。また、「悔過自新説」は、「小人禽獣の域」（現状・生活環境）から人（本来態）へ脱却し得たという実感のもと、その具体的手法を記録した書であり、あくまでも李二曲個人の思索結果と位置付ける。

読者対象への意識が希薄であった「悔過自新説」に比べ、李二曲の述作の多くは講学という場における質疑応答の様子を記録したものである。李二曲が講学の対象とした者は、知県や「明の遺老」（清朝に仕えなかった者）をはじめ、農民や商人など、多岐に渉る。

そもそも講学とは、各地に建設された書院での学問的集会であり、また、受講者という明確な対象を前に〈学〉を講じることでもあるから、受講者との対話に重点が置かれるのは勿論、講じる側の〈学〉に対する基本的姿勢やその時々抱いていた問題意識などが反映されやすい。加えて、受講者に教授内容を理解させるための工夫や、受講者の階層やレベルなど、様々な配慮が求められる場でもある。

続く第二章、第三章、第四章、第五章は、李二曲の言説の解析に加えて、以上の観点が意識された論述となっている。

第二章「観感録」に込められた聖人像では、李二曲が「観感録」（『二曲集』巻二十二）の編纂を通じて示した聖人像を考察する。

「観感録」は、李二曲自ら「類ひを以て自ら拘ふ者の鏡と為す」（「観感録序」と述べているように、「類ひ」（出自、社会的立場）によって自らを抑制する者という明確な対象を意識した書である。その構成要素は、塩丁（製塩業）出身の王心齋（良、1483～1541）をはじめ、樵夫（木樵）、吏胥（末端の官吏）、窯匠（陶器製作者）、商賈（商人）、農夫、賣油傭（油売り）、戍卒（警備兵）、網巾匠（帽子制作者）といった、士ではない明人の伝記である。

李二曲は、「観感録」所収の者たちの修学の切っ掛けを、先覚者（先人）の風聞に触れることで「一人一人の心には孔子がいる（箇箇人心有仲尼）」と自覚した点に見出し、更に各々の立場で志を立て、〈学〉に励み続ける姿勢を聖人と見なしている。要するに李二曲のいう聖人とは、自らの良知を発揮する者、即ち〈学〉に志して不断に励む者を指すのであって、家柄や過去は考慮されない。たとえ士でなくとも〈学〉に励み続ける者は聖人なのである。

請求者は、以上の聖人観が、講学の場集った農民や商人に生きる自信を与え、参会する高位高官の者たちに自らの行いを回顧させるに効果があったと指摘し、ここに「観感録」述作の意図があったと述べる。また、「観感録」所収の者たちが、王陽明（守仁、1472～1528）の先蹤あるいは王心齋門下に連なる点を根拠として、李二曲の〈学〉を陽明学系統と見なすのは、表層的な読解であると断じている。

第三章「『效先覚之所為』をめぐって」では、「東林書院會語」（『二曲集』卷十一）に収録される、朱子学者高彙旃（世泰、1607～1677）との〈学〉をめぐりやりとりを考察する。

先覚者（先人）の言行を模範とする（「先覚の為す所に效ふ」）ことは、李二曲の一貫した姿勢であるが、その場合、単に先覚者の言行を追従するのではなく、本体（自己）の確立に資するか否かという明確な判断基準があった。この基準は、「聖学の要領」を悟る切っ掛けを与えた先覚者・馮少墟に対しても例外ではない。

東林書院において、高彙旃と〈学〉を論じ合った際、先覚者の言行をどう捉えるかという問題が生じた。

程明道（顥、1032～1085）、程伊川（頤、1033～1107）、朱子（熹、1130～1200）の教えを実践し、加えて伯父・高忠憲（攀龍、1526～1626）の〈学〉の継承を自負する高彙旃が、先覚者の言行に学ぶことこそ〈学〉であると考え、朱子が〈学〉の在り方として重視した〈敬〉を提示したのに対し、李二曲は「敬は乃ち工夫にして、本体に非ざるなり。」と述べている。つまり、〈敬〉は確かに重視すべきであるが、あくまでも〈学〉の一手段なのであって〈学〉ではないとの考えから、高彙旃の見解を斥けているのである。

更に高彙旃は、先覚者の言行に学ぶことを重視した馮少墟を持ち出して自説を補強すると、李二曲は、先覚者の言行はあくまでも〈学〉の初動段階における手段なのであって、先覚者の言行に学ぶこと自体が〈学〉ではないと応じている。

請求者は、以上のやりとりを跡づけて、両者は「先覚の為す所に效ふ」ことを重視しながらも、高彙旃は程朱や馮少墟という名を重んじ、李二曲は本体（自己）を重んじた点が見解の相違を産む原因であったと指摘し、両者の姿勢は〈学〉の捉え方をそのまま反映したものと述べる。

第四章「〈心〉の確立」では、「學髓」（『二曲集』卷二）に示される〈心〉の定義と〈心〉を確立するための具体的手法について考察する。

王陽明の「聖人の学は心学である」（「陸象山先生全集叙」）という発言は、後世の儒学者にとって意識されるものであった。それは自らの〈心〉をどう捉えるかという問題に直結するからである。この問題に対する李二曲の答えは、「學髓」に提示されている。

「學髓」は、天が我々に対して賦与したもののなかでも、まずはその大なるもの・〈心〉を確立せよ、という孟子の言葉を具体的に説明した書であり、〈心〉を確立する具体的手法として静的工夫——齋戒・静坐・香——を提示するところに特徴がある。

請求者は、李二曲が齋戒・静坐・香といった静的工夫を提示したのは、あくまでも自らの〈心〉

の働きを發揮させるための手段としてであり、静的工夫そのものを重視した訳ではないと指摘する。また、李二曲には静と動とは表裏一体の関係であるという思考があり、この思考をもとに禅者の静的工夫との違いを明確にしていると指摘する。

以上の考察を踏まえて請求者は、「學髓」は〈心〉の性格・働きを正確に捉える点に主眼が置かれた書であり、いわば儒学者としての工夫論を提示した書と見なす。更に、「學髓」を通して、天より賦与された〈心〉を自覚し、〈心〉の確立を求め続けることが〈学〉なのだという主張を展開していると述べる。

第五章「明体適用の学」では、「整屋答問」（『二曲集』卷十四）、「體用全學」（『二曲集』卷七）、「司牧寶鑑」（『二曲集』卷二十八）に即して、李二曲のいう明体適用を考察する。

一般に、清初期の儒学は、宋明性理学から清朝考証学への過渡的段階と位置づけられ、その特徴として経世致用（世間的有用性）の面が強いとされる。

明体適用は、朱子が提唱した「全体大用」の系譜に連なる語であり、歴代の儒学者が等しく主張したスローガンである。李二曲は、明体適用の、本体（自己）を鮮明にし実用に適うという根本義を重視し、更に明体と適用とが不可分の関係にある語構造に着目して「儒者の学は明体適用の学である」と主張、明体を実現することこそ適用なのだという主張を展開する。その背景には、どちらか一方に偏ったまま、儒学者を自任する者が横行していたからである。

請求者は、まず「整屋答問」の解析を通して、李二曲が理想とする儒学者像を「洛閩の諸大老」（程明道、程伊川、朱子）に見出し、彼等を明体適用の体現者と位置づけて、自らはその継承者たらんとする態度表明が見られると指摘する。

次いで「體用全學」では、宋代明代の儒学者の著述名を列举し、それらを明体類と適用類とに類別した意味を解析する。請求者は、中でも明体類について、更に「明体中の明体」と「明体中の工夫」とに類別し、前者には陸王学（陸象山、王陽明）系統の著述を、後者には程朱学系統の著述を配当している点に着目し、この措置は両者の〈学〉への方法論的差異を踏まえたものであり、明体適用を實踐する儒学者という立場からして、何等矛盾するものではないと指摘する。

明確に為政者を対象とした「司牧寶鑑」は、先人の事跡を編纂した書である。「司牧寶鑑」の解析を通して、請求者は、李二曲が為政者に期待したことは、為政者としてのあるべき姿、即ち実心（まごころ）で実政（民衆救済）を行うことに他ならず、この在り方こそ明体適用であり、その体現者の言行を明体適用の理論的根拠として提示していると指摘し、「司牧寶鑑」に収録される呂新吾の『實政録』（抜粹）を解析する。結果、実社会に対して、対症療法的な策を提示することよりも、為政者の「民の父母」としての自覚を呼び起こすことに力点が置かれていると述べる。

また、李二曲の〈学〉は、あくまでも自己の確立に力点が置かれたものである。その一方で、実社会に対する方策として、例えば、良人（平民）や子女の売買を禁止するよう訴えたり、灌漑工事を提言したりという実用的な提言も行っており、その意味では世間的有用性も認められ

る。しかし、その主張の根柢には、実心（まごころ）で実政（民衆救済）せよという主張があったのであり、あくまでも為政者自身の覚醒を促すための提言なのであったと述べる。

第二部「李二曲に影響を与えた呂涇野・馮少墟の四書解釈及びその展開」では、第一部で明らかになった李二曲の〈学〉が四書読解にどう反映されているのかという観点を軸に、それに多大な影響を与えた呂涇野の『四書因問』、馮少墟の『疑思録』の内容を述べて分析し、その上で李二曲の『四書反身録』の考察に及ぶ。

朱子がいわゆる四書（『大學』『中庸』『論語』『孟子』）を確立して以来、歴代の儒学者は四書の解釈にことよせて自らが志向する〈学〉を模索してきた。夥しい数の四書注釈書はその営為の跡である。

李二曲は、四書注釈書のなかでも、蔡虚齋（清、1453～1508）の『四書蒙引』、呂涇野の『四書因問』、馮少墟の『疑思録』を必読書として挙げている。

蔡虚齋の『四書蒙引』を挙げたのは、朱子の解釈を忠実に踏襲し、初学者に有用という点に着目したからである。加えて陳紫峰（琛、1477～1545）の『四書淺説』、林次崖（希元、1481～1565）の『四書存疑』、唐汝諤（1551～1641?）の『四書微言』、張太岳（居正、1525～1582）の『四書直解』といった朱子注を敷衍した注釈書を挙げているのも、同様の理由による。

一方、呂涇野の『四書因問』と馮少墟の『疑思録』については、蔡虚齋の『四書蒙引』とは選択理由が異なっている。李二曲に拠れば、『四書因問』と『疑思録』は徳業に資する四書注釈書なのであって、制挙（科挙）対策に資するものではない。学ぶ者は呂涇野と馮少墟の意（思い）を理解すべきだ、と述べている。請求者は、李二曲が両書のどの点を徳業に資すると考えていたのかを明らかにするためには、両書がいかなる性格を有するのか確認する必要があると考える。

近年、「四書学」という研究領域が意識され、主に宋代以降の四書関連書に対する体系的かつ史的な研究が進められつつある。ただ、四書を「反身実践」の材として活用した李二曲の存在はあまり顧みられておらず、呂涇野の『四書因問』と馮少墟の『疑思録』についても同様である。請求者はこの点を重視し、まず、李二曲が特別視した呂涇野の『四書因問』と馮少墟の『疑思録』の特徴を明らかにし、その上で二曲の四書解釈の跡をまとめた『四書反身録』の考察に及ぶ。『四書因問』、『疑思録』、『四書反身録』という、三つの注釈書を経時的に捉えることは、四書学史の一端を明らかにすることにもなると考えられるからである。

第一章「呂涇野の『四書因問』」では、呂涇野の四書注釈書である『四書因問』を考察する。

『四書因問』は、『四書集注』を基軸とした四書注釈書であり、全編に涉って、質問者の四書に関わる問いに因んで呂涇野が答えを提示するという、問答体のスタイルが最大の特徴である。

通覧すると質問は種々雑多であり、また質問者のレベルや関心なども異なるためか、雑駁な印象は否めず、また、『四書因問』には字義的な説明が多く、挙業（科挙対策）向けとも見なされるが、呂涇野としてみれば、四書の内容を教授する際、字義的な説明になるのは四書の内容を正確に理解させようとするからであって、あくまでも実践のための説明なのである。

請求者は、『四書因問』は質問者の疑問を解消する切っ掛けと、四書をどう読み解けばよいのかという答えを、「聖人の思い」に依拠して示した跡であると指摘し、「行を尚ぶ」呂涇野の学的姿勢が顕れた書であると述べる。

呂涇野が王陽明の良知説に懐疑的だったのは、陽明の説き方では各人の問題意識に即した解答は提示できないという考えからである。請求者は、呂涇野の講学が王陽明の講学と二分するほどの活況を呈したのは、涇野の質問者に対する丁寧な対応の証なのであって、このような姿勢が『四書因問』に反映されていると述べる。

請求者は、呂涇野が重視した「善読」という姿勢を、「聖人の思い」を理解するための具体的方途であり、『四書因問』に見られる丁寧な解説は、質問者の疑問を解消するためだけでなく、自らの理解を検証する作業でもあったと指摘する。また、疑問を抱いた者への対症療法的な言辭は王陽明、ひいては王陽明門下の専売特許のようにいわれるが、呂涇野の言説にも見られる特徴であり、この時代に盛行した講学活動の所産と見なし得ると述べる。

第二章「馮少墟の『疑思録』では、馮少墟の四書注釈書である『疑思録』を考察する。

馮少墟の『疑思録』は、四書全体に対する注釈書ではない。その述作姿勢は、四書本文及び『四書集注』に対する信頼を前提としつつ、四書を読解するにあたって生じた疑義を解消する過程を示すものである。例えば、言及のない箇所は、四書本文及び『四書集注』を全面的に理解し肯定したという証である。この点からして、挙業（科挙対策）向けではないことが分かる。

馮少墟がなぜ「疑う」という行為を重視したかといえ、それは四書に示される「千古不磨の心」に気付くためである。これは、四書の内容を実践に活かそうとすることに他ならない。四書読解にあたっては、朱子や王陽明といった先入主は存在せず、朱子も王陽明も「千古不磨の心」に気付くために工夫（努力）した人物として同一視される。馮少墟が両者に差異を見出すとすれば、〈学〉の具体的手段に対してである。この姿勢は『大學章句』を改正するという行為に顕れている。

請求者は、『疑思録』に通底する「疑い」という行為は、聖人と凡人とを問わず、万人が具有している「千古不磨の心」に気付くための営為であり、その姿勢を「善読」と評されたと指摘する。

第三章「李二曲の『四書反身録』では、李二曲の四書注釈書である『四書反身録』を考察する。

『四書反身録』は、四書本文及び『四書集注』の内容を「反身実践」の材として活用し、読解した跡を記録した書である。四書に対する逐条的な言説ではなく、その文体も長短入り交じっており、体裁上の統一は見出せない。請求者は、この不揃いさが李二曲の自問自答の跡を象徴していると述べる。つまり、言及のない箇所は、自問した結果、四書の内容と自身との一致が見られた証であり、詳細な言及をしている箇所は、精確な理解が要請される内容と捉えていた証である。格物に対する詳細な説明は、その一例である。李二曲の姿勢は、馮少墟の『疑思録』に見られる「疑う」という姿勢と共通すると指摘する。

李二曲の四書理解は、一見『四書集注』を基軸としているようだが、『四書集注』を踏襲することに力点は置かれていない。あくまでも四書本文をどう「反身実践」するかという点に主眼がある。

例えば、『大學』に対しては、明体適用の書という意識のもと、明体と適用双方に対する精確な定義と、伝十章に関する言及が多いことが特徴として挙げられる。これは「平天下」を志向すべき為政者の自問に期待したからである。

また『論語』の「克己復礼」に対しては、己をどう捉えるかという点に苦心し、まず実際の己を「身の私欲」と捉え、私欲を除去して本来の己に復帰することの大切さを説き、その手立てを先人の事跡に見出している。これは、先人の著述や風聞を師とする李二曲独自の見解といえる。

李二曲にとって、四書は徹底的な自己検証の材料であり、四書の内容を自身及び実社会に活かそうという姿勢（「反身実践」）が根幹にあった。この読書姿勢を「善読」と表現して提唱したのである。

請求者は、四書を「善読」という姿勢は呂涇野、馮少墟、李二曲に共通するものとし、二曲が涇野の『四書因問』と少墟の『疑思録』を特別視したのは、両者に「善読」という読書姿勢を見出したからに他ならず、この姿勢を徳業と表現していると述べ、更に二曲は、涇野と少墟に共通する「善読」という読書姿勢を積極的に受容し、「反身実践」という在り方に展開させたと述べる。

以上の考察を踏まえて、請求者は『四書因問』、『疑思録』、『四書反身録』に共通する「善読」という読書姿勢を媒介とする時、呂涇野→馮少墟→李二曲という系譜が見出せるとし、この系譜は、明代中期から清初期にかけての四書学史の一端として、意識されるべき系譜と結論付ける。

論文審査の結果の要旨

本研究の最大の特徴は、我が国に於いて初めて李二曲が明末清初期の思想界の中で、独自に自らの〈学〉の在り方を追い求める有様を明らかにし、主要な著述（資料）を丹念に分析し、一本にまとめた点にある。

李二曲研究の専著としては、林繼平『李二曲研究』（1970年）、王孺松『李顛』（1978年）、朱康有『人道真理的追尋——李二曲心性実学研究』（2003年）、許鶴齡『李二曲「體用全學」之研究』（2004年）、房秀麗『追尋生命的全体大用——李二曲理学思想及其教育的価値』（2010年）等、中国、台湾に数冊ある程度で、日本では皆無である。

そもそも請求者は、朱子と陸象山（九淵、1139～1192）の折衷、あるいは朱子と王陽明の折衷という評価から等閑視されがちであった李二曲の言説を虚心に読解し、折衷に込められた真意の解明を志した。李二曲の言説は、「朱子学者」か「陽明学者」か、あるいは「折衷学者」か

という視点では読み解くことはできず、素朴ではあるが「儒学者」という視点によってはじめて肉迫できるのではないかという思いからである。歴代の先人の言行を積極的に受容し、実践に活かそうとした李二曲の在り方を跡づけた本研究は、請求者の思いを裏付けるに十分な説得力を持ち得ている。

例えば、第一部第二章で扱った「観感録」は、収録される人々の大半が黄宗羲『明儒學案』の「泰州学案」に見られることから、現状では王陽明門下における〈学〉の向き合い方を知る補助的資料として扱われるに過ぎない。請求者は、李二曲の言説に即して、王陽明門下という限定的な視点を排除し、人としての本来の在り方を気付かせる書として位置づけたのは、清初期に於ける講学活動の実態を知るという点で意味あることといえる。

第一部第三章で取り上げた高彙旃は、東林書院を支えた人物として著名であるが、現状ではあまり注目される人物とはいえない。部分的ではあるが、本研究に於いて高彙旃の言説を考察したことは清初期の思想界を考える上でも有益である。

清初期に於ける儒学の特徴として経世致用の学を挙げ、明体適用を掲げた李二曲もその一翼を担ったという見解は、山井湧氏を踏襲するものである。第一部第五章で扱った「司牧寶鑑」は、明体適用の実践者としての先人の事跡をまとめた書であったが、その中に収録される呂新吾（坤、1536～1618）の『實政録』（抜粹）について、李二曲が「最も適用たり」と評したことに着目してその内容を丁寧に分析したことは、二曲のいう明体適用をより鮮明する意味で評価できる。

第二部「李二曲に影響を与えた呂涇野・馮少墟の四書解釈及びその展開」で扱った、呂涇野の『四書因問』、馮少墟の『疑思録』、李二曲の『四書反身録』については、これまで本格的な研究は皆無といって良く、特に呂涇野については「明代の朱子学者」という程度の認知度である。

本研究に於いて、『四書因問』、『疑思録』、『四書反身録』の存在とその内容を分析し、更に四書を「善読」という観点から呂涇野→馮少墟→李二曲という系譜が見出し得ると結論付けたことは、四書学史研究を一步前進させるものとして評価できる一方、請求者も指摘しているが、李二曲は実際に自然災害への対処法や人身売買禁止を提言するなど、常に社会に目を向けた言行を示していた。李二曲のいう明体適用の内容をより詳細にするためには、為政者の「民の父母」としての〈心〉に期待する言説にのみ着目するのではなく、具体的施策に関する言説も考察対象としている点も新しく、評価し得よう。

ただ、請求者は李二曲が黄宗羲や孫奇逢と共に「清初三大儒」と称された意味を明らかにする必要性を感じながらも言及していない。黄宗羲や孫奇逢との学説上の相違点などを鮮明にすることで、より一層李二曲の明末清初期の思想史上の存在意義が明らかになるのではなかろうか。

関連して、本研究は李二曲の言説を精確に読解・分析することに主眼が置かれているためか、二曲が注目した先人への言及は詳細を極めるが、二曲の言行がどのような影響を与えたのかに

については同時代人を感化した点への言及に限られ、後世に対する影響について触れていないのは遺憾である。

将来、このような課題を着実に継続することによって、清初期の思想界ひいては日本漢学へと視野を拡げることが期待される。更に、中国學術史上に於ける李二曲の學術的位置付けも視野に入れ、これらの研究を纏めていくことを望む。

また、本研究が我が国に於ける李二曲研究の専著として、今後我が国の李二曲研究の出発点となることは間違いない。

よって、本審査委員会は、本研究を博士（文学）の学位論文に相当するものと認定する。